

安吾と囲碁

2023

9

・

2

土

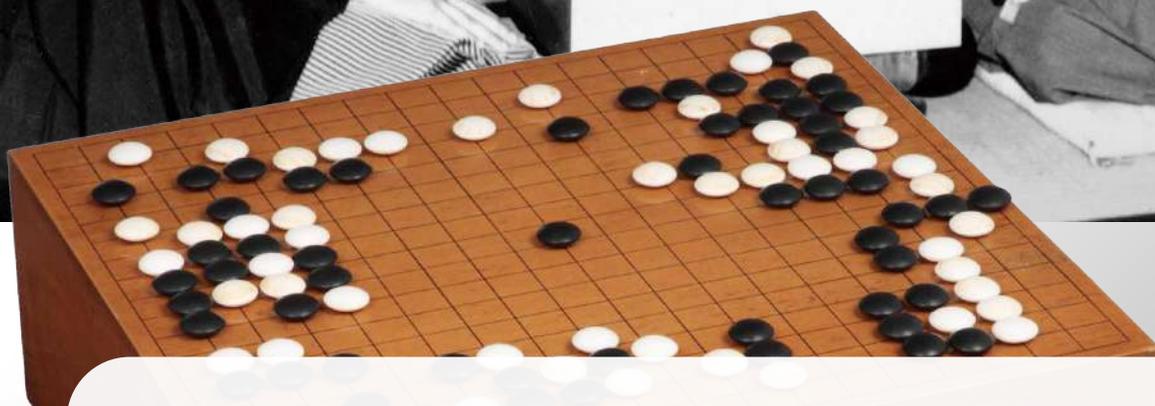
～

12

・

17

日



会期 2023.9月2日(土)～12月17日(日)

77日間 1,199名

関連イベント

「安吾風の館」見学とゆかりの地めぐり 9月9日(土)参加者 4名

坂口安吾生誕祭117 第1部 「安吾風の館」見学とゆかりの地めぐり

参加者 19名

旧市長公舎

安吾風の館

〒951-8104 新潟市中央区西大畑町5927番地9

安吾と囲碁

2023. 9月2日(土) — 12月17日(日)

1937年、安吾は書きかけの長編小説「吹雪物語」をもって京都に出かけ、仕上げたものの納得がいかず、囲碁に打ちこんだ。「碁は長時間にわたって理知を傾けつくす」「勝敗それ自体が興味」（「青春論」1942年）なので、一時的に「文学と断絶」（「囲碁修行」1938年）するにはふさわしかったのだろう。

昭和初期、碁界は大きな変革期を迎える。21世本因坊秀哉が引退すると名跡を日本棋院に譲渡し、これまで続いた家元制の終身名人から、本因坊戦を勝ち抜いた実力者に名跡が与えられる制度へと移行したのだ。

安吾は、愛好家の作家や学者らの交流を図って作られた文壇囲碁会に参加するようになり、碁を通じての交友も広げていった。

愛用の碁盤・碁石や観戦記、棋風に触れた原稿や書簡など、安吾の囲碁への耽溺ぶりを紹介する。

◇おもな展示作品

- 自筆原稿（未定稿） [呉清源について] 1951年頃
- メモ 本因坊・呉清源十番碁観戦メモ 1948年
- 安吾愛用の碁盤、碁石
- 日本棋院免状 二段 1950年11月
- 書簡 野上 彰 坂口安吾宛 封書 1951年2月頃
- 書簡 尾崎一雄 坂口安吾宛 はがき 1953年5月20日
- 書簡 頼尊清隆 坂口安吾宛封書 1954年1月20日 ほか
- 初出紙 観戦記「本因坊岩本薫・呉清源十番碁」 読賣新聞 1948年7月
- 初出誌 「呉清源」『文学界』 1948年10月 新潟市立中央図書館蔵
- 蔵書 川端康成著『呉清源棋談・名人』 文藝春秋新社 1954年 ほか

【和室展示】 坂口綱男撮影

高麗神社（埼玉県日高市）の獅子踊り 2015年

次回展覧会のご案内

安吾って！？ Part 6

関連イベント

「安吾風の館」見学と安吾ゆかりの地めぐり

日時：9月9日（土） 13：30～15：30

集合場所：安吾風の館 参加費：500円 定員10名

申込・問合せ：安吾の会事務局（新潟・市民映画館シネ・ウインド）

主催：安吾の会

TEL 025-243-5530



バスのご案内 新潟駅万代口バスターミナル 7番線から、または観光循環バス乗車「西大畑坂上」バス停下車徒歩3分

■ 開館時間 10：00～16：00

■ 観覧無料

■ 休館日 毎週月・火曜日 祝日または振替休日の場合はその翌開館日

旧市長公舎 安吾風の館

〒951-8104 新潟市中央区西大畑町 5927 番地 9 TEL & FAX 025-222-3062 2

安吾と囲碁

坂口安吾が好きなもの、といってまず挙がるのがスポーツで、中学時代から陸上、相撲などに親しみ、文壇仲間とも野球やゴルフに興じている。次いで囲碁、映画。耽溺する癖があるのか、「真昼の決闘」は気に入って十数回も見たと、妻三千代は書いている（「父と子」1985年）。

1937年書きかけの小説「吹雪物語」を持って京都に向かった安吾は、なんとか仕上げたものの納得がいらず、目の前の原稿から逃げこんだのが囲碁であった（「囲碁修行」1938年）。

囲碁は中国に起こり、日本では平安時代から広く親しまれたという。戦国時代では武士の嗜みとなり、江戸、明治時代以降は将棋とともに、庶民の中にも広く浸透した。囲碁は、19×19の格子が描かれた盤上に黒・白の石をおいて、自分の石で囲んだ領域の広さを競うボードゲームだが、「布石」「一目置く」など囲碁用語が慣用句として使われるように、人々の生活にとけ込んでいる。

安吾は、将棋については1947年から49年にかけて、数々の名人戦の観戦記を書いている。一方囲碁の観戦記は、岩本薫と呉清源の十番碁だけであるが、「棋院の大手合いを度々見学した」（「名人戦を観て」1947年『将棋世界』）という。「大手合 おおてあい」とは、棋士の昇段を審査するため、日本棋院、関西棋院などの組織で行われた対局制度のことで、日本棋院では2003年に廃止されるまで行われていた（関西棋院は2004年廃止）。

1937年『囲碁春秋』編集長だった野上彰が企画して、囲碁愛好家の作家や学者らの交流の場ともなった「文人囲碁会」に安吾も参加した。尾崎一雄や川端康成、豊島与志雄、小林秀雄など多くの作家と対戦し、囲碁に係わる作品も残している。『都新聞』の文芸欄に三回にわたって書いた「囲碁修行」1938年では京都で本格的に囲碁にとり組んだ様子を、「文人囲碁会」（初出未詳）では、対戦した各氏の棋風と文学を論じている。「明治開化安吾捕物帖」1950～52年 その七「石の下」は、珍しい囲碁の手筋を題材にしており、「安吾新日本風土記」では「碁好きにはなつかしい地である」と、碁盤や碁石の産地として宮崎を紹介している（宮崎県の巻 1955年）。

将棋の名人や挑戦者を“勝負師”の対決として客観視する観戦記を書いているのに対して、囲碁の観戦記は趣が違ふようだ。当時圧倒的な実力で「棋聖」とも称された呉清源についても、「一匹の虫を踏みつづすにも、虎が全力を尽くすが如くである」（「呉清源」1948年）と勝負に際しての非人情を評価しながらも、宗教に入れこむ人間呉清源の面も受入れている。また「市井閑談」（1939年）や「明日は天気になれ」（1953年）では、囲碁を通して普通の人の姿を描き出している。

「このまる一年半、ゆっくりした気持ちで石を握ったことはない」（「私の碁」1948年）という言葉は、安吾の日常の中に囲碁があったことを示している。絶筆となった「砂をかむ」は、尾崎一雄に頼まれて『風報』（1955年3月号）に書いたものであるが、その原稿を受けとった尾崎の手紙で「この頃僕は碁が強くなったが、貴兄は打たぬから弱くなったでせう、負かしたいが桐生は遠いので残念です」（1955年2月8日付はがき）とある。

尾崎はまた、安吾の人となりや「大きなことを考へておながら、小さなことを気にする」面があり、それで「碁が私より強かつたくせに」「考へ過ぎて負けるのだった」（『坂口安吾選集』第一巻 月報4）と評している。

女将が囲碁好きで、数々の名対局も行われた小石川・もみじ旅館を通して手に入れた碁盤や碁石は、安吾自慢の品であった。宮崎産の榧かや で作られた碁盤に、同じく宮崎産蛤の白石、那智の黒石。東京・蒲田の坂口家で、兄弟で打ち合ったであろう碁石とあわせて紹介する。是非、囲碁に耽溺する安吾の姿を思い描いていただきたい。

安吾と囲碁

2023年 9月2日(土)～ 12月17日(日)

No.	種類	作者名	作品名	年	出版社	備考	所蔵者
1	自筆原稿	坂口 安吾	未定稿 [呉清源について]	1951年 頃		専用原稿用紙4枚 ペン	
2		坂口 安吾	未定稿 [呉清源について]	(不詳)		専用原稿用紙 ペン	
3		坂口 安吾	豊島さんのこと	1955年		コクヨ原稿用紙 鉛筆	
4	メモ	坂口 安吾	本因坊呉清源十番碁観戦メモ	1948年		読賣新聞文化部原稿用紙 鉛筆 4枚	
5	初出紙	坂口 安吾	本因坊岩本薫・呉清源十番碁	1948年	読賣新聞	7月8日、9日	
6	初出誌	坂口 安吾	呉清源	1948年	文学界社	第2巻 第10号	市図書館
7	書簡	野上 彰	安吾宛 年賀状	1951年		文壇本因坊戦案内	
8		野上 彰	安吾宛 封書 2月頃	1951年		第一回文壇本因坊戦	
9		野上 彰	安吾宛 はがき 8月21日	1953年		文人囲碁会案内	
10		尾崎 一雄	安吾宛 はがき 5月20日	1953年		文壇本因坊戦	
11		尾崎 一雄	安吾宛 はがき 2月8日	1955年		『風報』寄稿への礼	
12		頼尊 清隆	安吾宛 封書 1月20日	1954年		文人囲碁会など	
13		もみじ旅館	安吾宛 封書 6月9日	1950年		碁盤碁石について	
14		遺愛品		碁盤、碁石	/		安吾所蔵
15			碁石	/		蒲田・坂口家旧蔵	
16	免状		日本棋院 二段免状	1950年			
17			日本棋院 三段追贈免状	1955年			
18	蔵書	鈴木為次郎	明解図式囲碁大事辞典 互先編	1934年	誠文堂	上・下巻	
19		高部 道平	碁道史談叢	1944年	創藝社		
20		呉 清源	碁碁全集 死活と収束	1949年	文藝春秋新社	第1巻～第10巻	
21		高部 桂二	碁の打ち方	1951年	大泉書店		
22		相田隆太郎	互先碁の打ち方	1953年	大泉書店	献辞署名	
23		川端 康成	呉清源棋談・名人	1954年	文藝春秋新社	献辞署名	
24		坂口 安吾	「豊島さんのこと」(月報27)	1955年	筑摩書房	『現代文学全集』33	
25		資料	頼尊 清隆	「花妖」の頃から	1956年	東京 創元社	『坂口安吾選集』月報3
26	尾崎 一雄		坂口安吾さんについての断片	1956年	東京 創元社	『坂口安吾選集』月報4	
27	尾崎 一雄		碁でのつき合い(月報1)	1967年	冬樹社	『定本坂口安吾全集』	
28	座談会		呉・藤澤十番碁を語る(7/7)	1951年	読賣新聞	加藤信・木村義雄・安吾	
29	パネル	写真	呉清源・坂口安吾 対局	1948年			/
30		棋譜	呉清源・坂口安吾 対局	1948年		『月刊読売』5月号掲載	/
31		写真	本因坊岩本薫・呉清源十番碁	1948年		坂口安吾観戦	/
32		写真	文人囲碁会	(不詳)			/
33		写真	坂口安吾追悼囲碁会	1955年			/
34		新聞記事	呉清源死亡記事 12/2付	2014年	朝日新聞	1、38面	/

*作品保全のため複製を展示する場合があります。 *所蔵者欄：市図書館＝新潟市立中央図書館 空欄は、新潟市・坂口安吾遺品資料

【和室 写真展示】

坂口綱男 撮影 高麗神社(埼玉県日高市)の獅子踊り 2015年

【関連事業】

「安吾 風の館」見学と安吾ゆかりの地めぐり 9/9(土) 13:30～15:30

申込：新潟・市民映画館シネ・ウインド (tel 025-243-5530) 電話にて申込。 参加費500円

関連年譜 (1939 年～1940 年)

1937 (昭和12) 年 31 歳

1 月 隠岐和一が京都の実家におり、長篇に没頭したいなら別宅に泊めてくれるというので、京都へ行くことに決め、31 日夜行列車に乗り込む。隠岐の別宅の2階に仮寓。昼は小説を書き、夜は車折神社裏の嵐山劇場へ旅芸人の芝居を見に行ったり、隠岐と飲み行ったりした。

2 月末頃 伏見区稻荷鳥居前町の計理士事務所の2階を間借りすることになり、転居。

5 月 25 日 「吹雪物語」第6章600 枚以上が書き上がる。

6 月 9 日頃 家賃・食費が安い、伏見区深草町の上田食堂2 階へ転居。

「吹雪物語」には手をつける気が起こらず、各種説話や各地の伝説、奇談、怪談など江戸時代の随筆まで読みあさる。

秋、食堂2 階の広間に碁会所を開かせる。

11 月 10 日 「吹雪物語」第7 章が書きあがり、第8 章を除いて第1 稿が完成し、推敲に入る。

1938 (昭和13) 年 32 歳

6 月 半ば頃、「吹雪物語」の推敲を終え、京都から帰る。竹村書房に原稿を渡して、菊富士ホテルに戻る。

6 月 29 日 かわいがっていた松之山の姪・喜久(村山真雄の娘)が20 歳で自宅庭の沼に入水自殺をする。

7 月 『吹雪物語』を竹村書房から刊行。「新しい小説」との自負も、批評はほとんどなく、検閲で伏せ字だらけになり、売れ行きも悪く、失意に沈む。

8 月頃 若園清太郎に、講談社で『講談倶楽部』を編集していた岡田東魚を紹介される。年齢は10 歳以上年上、碁は段違いに強い、文学愛好家。

岡田に連れられて、本郷の碁会所「富岡」に出入りするようになる。そこで別格に強い、東大囲碁部主将の頼尊清隆らと知りあう。岡田は板橋に住まいがあるにもかかわらず、安吾を敬愛して、菊富士ホテルに仕事部屋を借り、安吾の生活をも補助していたらしい。

秋頃より、日本棋院(赤坂溜池)で催される文人囲碁会に顔を出すようになる。

文人囲碁会では、旧知の小林秀雄、三好達治、尾崎一雄のほか、主宰の野上彰、豊島与志雄、川端康成、村松梢風、倉田百三、三木清、徳田夢声らと相知るようになる。

1939 (昭和14) 年 33 歳

2 月 5 日 文人囲碁会で、野上彰、頼尊清隆、岡田東魚、大江勲、鶉殿新一、若園清太郎、伊田和一(田岡敬一)、豊島与志雄らと本郷チームを結成。

尾崎一雄、榊山潤、砂子屋書房(上野桜木町)社主山崎剛平らを中心に、上野砂子屋チームと対戦して圧勝する。

3月 長編執筆のため、竹村書房の竹村坦の勧めで取手に転居することを決める。菊富士ホテルを退去する際、「吹雪物語」上梓したとき家賃を払う約束だったため、原稿を持ち出せず、岡田東魚に預ける。岡田は原稿を包んで安吾と共に菊富士ホテルを出る。翌年岡田は板橋の家を売って、一時神奈川県片瀬（現・藤澤市）に移り、1940年4月には郷里の函館に引っ越す。安吾没後に岡田はその原稿を函館図書館に寄贈。現在、「吹雪物語」の自筆原稿は、函館図書館所蔵となっている。

5月16日 竹村坦と茨城県取手町に行き、休業中の取手病院の離れに住むことになる。その後、野上彰、頼尊清隆、岡田東魚が訪れ、若園清太郎、関義らを加えて、「野麦」もしくは「青麦」という同人誌を作る計画をたてるが、資金もなく、同人誌が実現する当てはなかった。

取手にいた8ヵ月間は、短篇を1つと匿名批評を書いただけで、月に二回ほど東京に出て、若園ら友人達を訪ね、映画を見たり碁を打ったりした。

1940（昭和15）年 34歳

1月中旬、小田原に住む三好達治に誘われるまま、三好家を訪れ、のち早川橋際亀山別荘を借りて転居。食事は毎日三好家でとり、よく三好と碁を打った。三好からキリシタンに関する本を勧められ、面白さにのめり込んでいった。歴史に造詣の深い伊澤幸平と親しくなり、資料検索の手伝いを頼むようになった。

4月 頼尊清隆が都新聞に入社。

秋頃から、東京蒲田の実家にいることが多くなり、11月25日より12月初めまで新潟に帰省。

12月31日 夕方浅草雷門で大井廣介と会い、意気投合。『現代文学』同人に加わる。同誌には終刊までの3年間、毎号のように作品を発表、座談会にも積極的に参加した。

七北数人編「坂口安吾年譜」（坂口安吾全集 別巻）をもとに作成

囲碁 いご

二人で行うボードゲームのひとつ。交互に 19×19 の格子が描かれた盤（碁盤）上に、白黒の石（碁石）を置いていき、自分の石で囲んだ領域の広さ（自分の色の石によってより広い領域＝地を確保する）を競う。一度置かれた石は、相手の石に全周を取り囲まれない限り、取り除いたり、移動させたりすることはできない。

発祥は中国と考えられ、『論語』『孟子』のなかに碁の話題が出て来るが、日本でも平安時代から広く親しまれ、枕草子、源氏物語など古典文学にも登場する。戦国時代は武将のたしなみとして行われ、次第に庶民にも広く普及していった。江戸時代には、家元四家を中心としたプロ組織（家元制度）ができ、明治以降も引きつづき広く親しまれ、各地に碁会所ができるなど庶民の娯楽としても定着していった。

駄目、布石、捨て石、定石など囲碁用語が慣用句として使われていることも多く、一般にも馴染みがある。

〈用語〉

互先 たがいせん

棋力が同じ人同士によるハンデなしの対局。一局毎に黒石（先）、白石（後）を持ちかえる。

置き碁 おきご

棋力の差がある人と対局するとき、ハンデをおいて（＝置き石）対局すること。置き石は星（線が交差するところ）のところにおく。差が開くほど、置き石の数を増やす。差が2つなら2子（目・もく）局、3つなら3子局（3もくきょく）。

子・目：地の数や碁石の数を数える単位。ex.三目勝つ、二目置く

一目置く

弱い方が先に石を一つ置いて始めること。そこから、相手に敬意を表するという意の慣用句となっている。

コミ

互先するとき、黒が白に与えるハンデのこと。囲碁は先手の黒が有利なので、普通に対局すれば黒が勝つ可能性が高い。不公平をなくすため、白は最後に6目半をもらえる。

整地 せいち

終局後、お互いの地を数えやすくするため、陣地の形をきれいに整えること。

定先 じょうせん

棋力の差が一つしかないときのハンデのこと。定先では、下手したてが黒をもち、上手うわてが白をもち、コミがないので、先手の黒が有利になる。

布石 ふせき

一局を、序盤、中盤、終盤とわけると、起手から中盤戦（40～50手くらい）に展開するところまでの要所要所への石の配置。

専門棋士は、布石に時間をかけ、工夫をこらすという。

井目 せいもく（聖目、星目）

盤面に記された9つの黒い点を星と呼び、碁盤の中央にある星を天元という。置き碁において、9つの井目すべてに石をおいてから対局に入る。つまり9子局のこと。

石立 いしだて

石組み、石配りのこと。

定石 じょうせき

昔から研究されてきて最善とされる、決まった石の打ち方。一般用語としても「セオリー」という意で使われる。

日本囲碁連盟「囲碁用語」等を参考



呉清源・坂口安吾 対局 1948（昭和 23）年春

『月刊読売』の企画「呉清源 対 一般名士対局」で、坂口安吾が相対した。ハンデは五子。呉氏を長考させる場面もある出来過ぎた碁であったと安吾自身は振り返る（「呉清源」1948年）。ほかに、政界から鳩山一郎、文壇から川端康成、豊島与志雄らも対戦したという（『月刊読売』1948年5月号掲載）。

安吾は呉清源について、「一匹の虫を踏みつぶすにも、虎が全力を尽くすが如くである」（同）といい、勝負にあたっての非人間性、非人情の正確さに対戦者は食い込まれてしまうのだろうと分析している。「呉清源には、気分や情緒の気おくれがない、自滅することがない」（同）というのだ。

勝敗は、呉清源の中押しちゅうおし勝ち（終局前に安吾が負けを認めた）。

碁盤・碁石

安吾自慢の碁盤・碁石。小石川のもみじ旅館の手配で手に入れたもの。碁石は、鈴木五郎（五良）五段から二万円で譲ってもらった、代金送料等で五万二千二百円と手紙にある。もみじ旅館は、碁好きの女将で政財界の歴々が碁会に使うことも多く（「九段」1951年）、呉清源と岩本本因坊十番碁もここが会場となった。

「安吾新日本風土記 高千穂の冬雨降り」1954年で、安吾は碁盤の最上のものは榧カヤの木で作られ、日向小林の産という。碁石の白石は日向の蛤から、黒は那智の黒石から作られると解説している。榧は弾力、芳香、音、味わいで優れているという。

もう一組の碁石は、蒲田の家で長年使われていた碁石。安吾も坂口家の二人の兄や、友人らとこの石で打ったであろう。

安吾新日本風土記

第一回 高千穂に冬雨ふれり （宮崎県の巻）

（略）

私のような碁好きの者にとっては日向はなつかしい国なのである。碁盤の最上のものはカヤの木で作られる。カヤの大木というものは少いものだが、その産地が日向の小林の奥だ。また碁石の最良のものは日向蛤に那智黒と云って、白石が日向の蛤で作られ、黒石が那智の黒石で作られる。日向の日向市のあたり、伊勢ヶ浜というところでのこの白石が作られているのである。大きな工場というものではなく、家庭工業で、大きな蛤を筒でくりぬく。自動車の窓からその作業の風景が見えたが、私にとって懐かしいものであった。最良のカヤ盤と白石。神話の国には大そうピタリした産物だが、もっとも神様や昔の天皇がそういうものを使っていたわけではない。正倉院御物でも見られるように昔は盤も石も鉋石宝石の類いであったらしい。

（略）

この蛤の碁石がいつか日向蛤というものに定着したのはどういう次第か知らないが、たぶん大きな蛤が日向に多いせいかも知れない。蛤というものは食物だ。厚さ四分五分という碁石がとれるような蛤ならばよほど大きいに相違なく、貝殻を碁石にすれば当然その肉は食べなければならぬわけ、（以下略）

もみじ旅館 安吾宛書簡 書留

一九五〇（昭和二五）年 六月九日消印

御滞在中は おかまひいたしませす失礼いたしました。

御たのまれいたしました先日の碁盤と碁石はとゞきましたでせうか
碁石は貳萬圓で鈴木五朗五段からいただきました。送料、ひも、布
等にて同封受けとりの如くで御座います。

六萬圓御預りの内 五萬千二百圓をひき 八千八百圓の小為替を
御送りいたします

右御受納下さいませ

先日は日本棋院にて大試合に出場させていただき とても面白い
御座いました

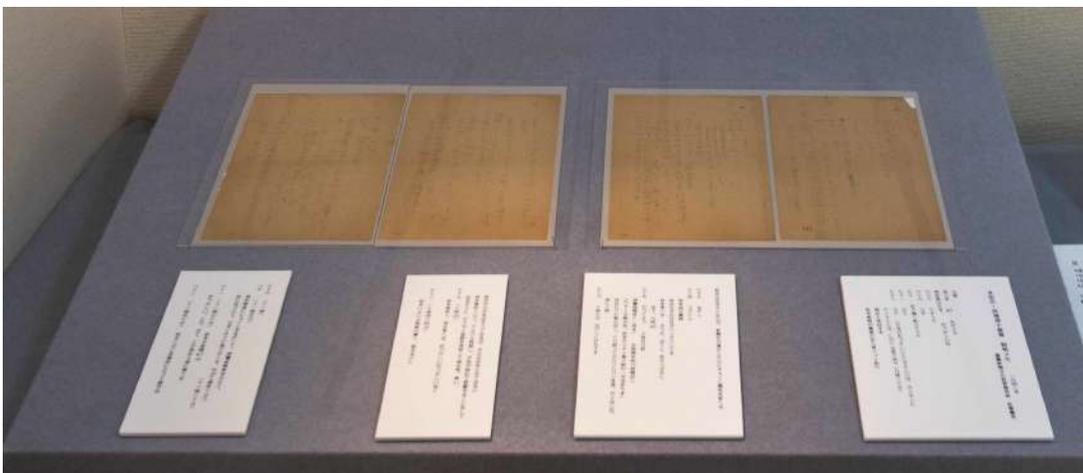
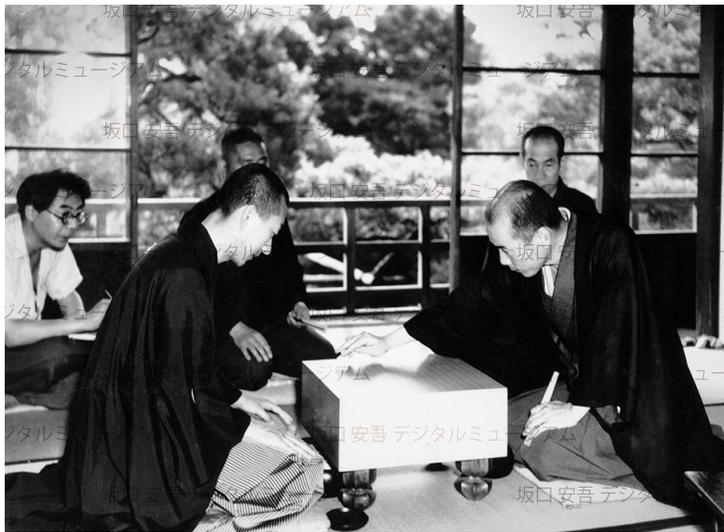
どうぞ又ぜひ御上京の節は いらして下さいませ 御まち申上げて
居ります

何卒 奥様によろしく御つたえ下さいませ

〇〇〇〇〇〇（女将名前）

坂口先生

御もとえ



本因坊・呉清源十番碁 観戦メモ

讀賣新聞社文化部原稿用紙 鉛筆

1948年7月7日 小石川・もみじ旅館で行われた対戦を観戦したときの安吾のメモ。岩本薫本因坊と呉清源八段の対局。1～4と大字でふられた讀賣新聞社の原稿用紙4枚に、戦局と棋士の様子が鉛筆で記されている。

観戦記は、翌8日と9日にわたって讀賣新聞に掲載された。挿絵は、日本画家の安田靉彦。対戦中スケッチに訪れている。

メモがそのまま観戦記になるとは限らないが、鉛筆書きのメモをみると、安吾としては少し薄い字で、それゆえ筆記の速さを感じられる。このメモからは、対戦棋士はもとより、その間近にいる安吾の緊迫感まで伝わってくるようだ。

初出紙 『讀賣新聞』 1948年7月8日、9日

坂口安吾

本因坊岩本薫・呉清源十番碁 観戦記

対局は、小石川のもみじ旅館で行われ、[上]の対局写真には、すぐ脇で観戦する安吾の姿もある。[下]には、日本画家安田靉彦によって両者の佇まいが描き出される。安田靉彦は、対局当日、正午から3時にかけてスケッチを行っている。

対局前夜遅くに、会場に現れた呉清源は、2日目に入ってようやく本調子といった感じ。本因坊はあたかも剣客の構えで、眼はまさに完全な正眼だという。

読売新聞

1948年7月8日、9日

岩本 薫

1902（明治35）—1999（平成11） 97歳

島根県益田市出身

3歳で韓国釜山へ移住するが、高部道平の勧めで上京し、広瀬平次郎門に入る。1948年8段に推挙され、1967年9段、1973年71歳で名人リーグ入り（日本における7大タイトル獲得経験者では最年長にあたる）。

1983年引退。日本棋院名誉顧問をつとめる。

1967年紫綬褒章、1972年勲三等瑞宝章受賞、1976年サンフランシスコ文化勲章受章。1989年棋道賞「国際賞」。

中盤の戦いに強く、序盤にあちこち散在する石が徐々に相手を圧していくことから「豆まき碁」と呼ばれた。1945年東京大空襲で日本棋院が焼失した際、自宅を仮事務所にするなどして、瀬越憲作らと復興に尽力した。

また囲碁の海外普及に尽力し、欧米、南米での指導や、私財を投じて岩本囲碁振興基金を設立し、囲碁会館の建設（サンパウロ、アムステルダム、ニューヨーク、シアトル）など多大な貢献をした。

將に劍客の構え
氣魄画心を圧す

本因坊・吳清源十番碁親戦記 樋口安吾

文人囲碁会

1937年安永一、田岡敬一らと雑誌『囲碁春秋』を発刊し、編集長をつとめていた野上彰が38年に企画、囲碁愛好家の作家や学者らの交流を図って作られた。赤坂溜池の日本棋院を借り、月一回開催され、会費が1円（席料50銭、食事雑費50銭）、高川格、島村利博、高橋義行、前田陳爾らが専任の先生となり、呉清源が指導碁を打ったりした。

メンバーには、川端康成、豊島与志雄、小林秀雄、三好達治、松村梢風、尾崎一雄、火野葦平、榊山潤、徳川夢声、柳田泰雲、木村義雄らがいた。安吾も38年秋頃から岡田東魚、頼尊清隆らと顔を出すようになり、碁会を通じて交流を広げていった。



写真に見える安吾の相手は、野上彰とおもわれる。

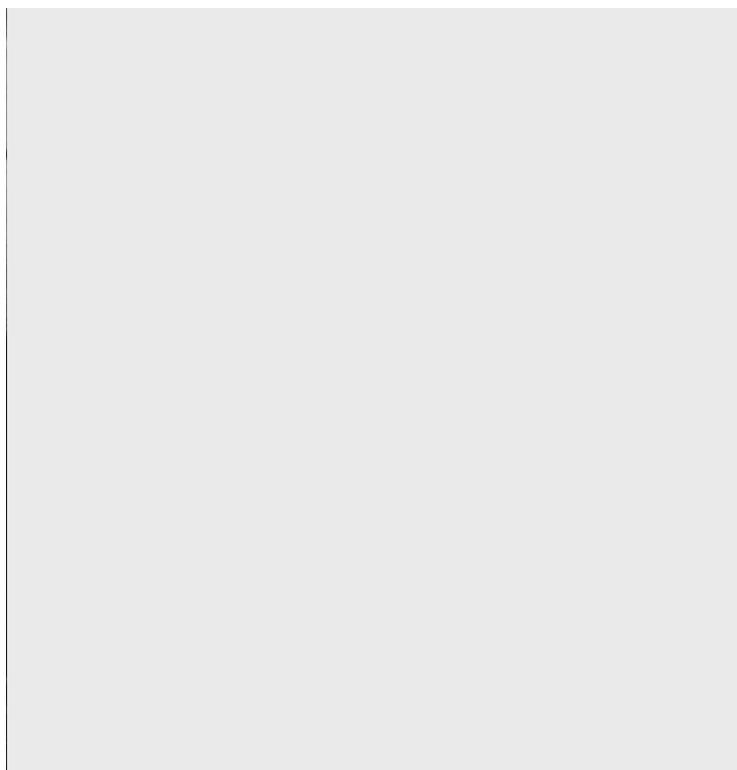
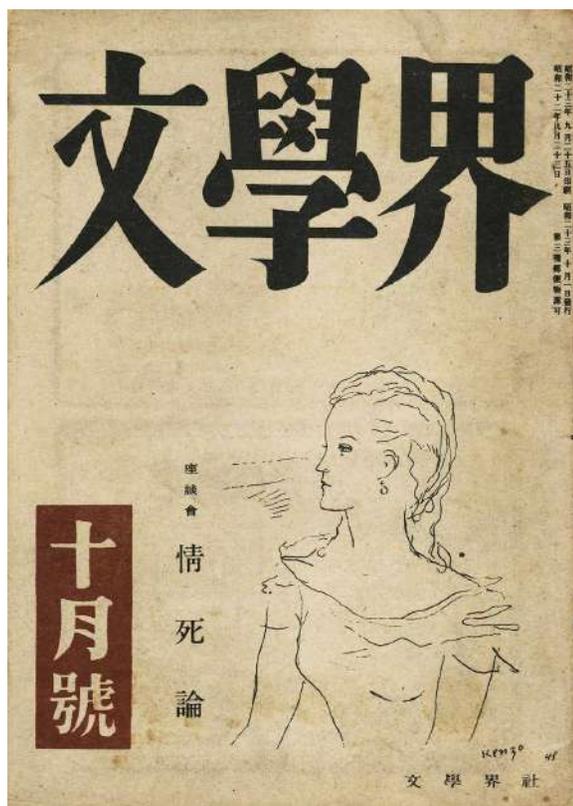
野上 彰 1909（明治42）—1967（昭和42） 58歳

徳島県徳島市新内町に浪曲師の次男として生まれる。本名：橋本登
1929年東京大学文学部に入学し、翌年京都大学法学部に転入。この頃京都の吉田操子みさこ の下で囲碁を学ぶ。のち東大を中退。

34年仙台市に学生囲碁会所を開所、『河北新報』の囲碁欄解説を担当。
36年上京し、翌37年安永一、田岡敬一らと『囲碁春秋』（岩谷書店）を発刊、編集長となる。38年「文人囲碁会」主宰し、日本棋院で定期的を開催し、囲碁愛好家の作家や学者の交流を図る。ここで知り合った川端康成、豊島与志雄に師事し、筆名を「野上彰」とする。安吾も岡田東魚、頼尊清隆らと秋頃より文人囲碁会に参加。40年日本棋院の『囲碁クラブ』編集部に入り、発行部数を倍増させ、編集長となり、11月安吾の「負け碁の算術」を掲載。『棋道』の編集も兼任する。

43年日本棋院を退職し、創作活動を始め、詩や童謡、戯曲、訳詞などを発表し、戦後は芸術前衛運動を推進した。放送劇の主題歌作詞、台本、オペレッタの演出など多彩なジャンルで力量を発揮した。

著作『定本囲碁講座』全3巻ほか、川端康成共訳『ラング世界童話全集』など多数。

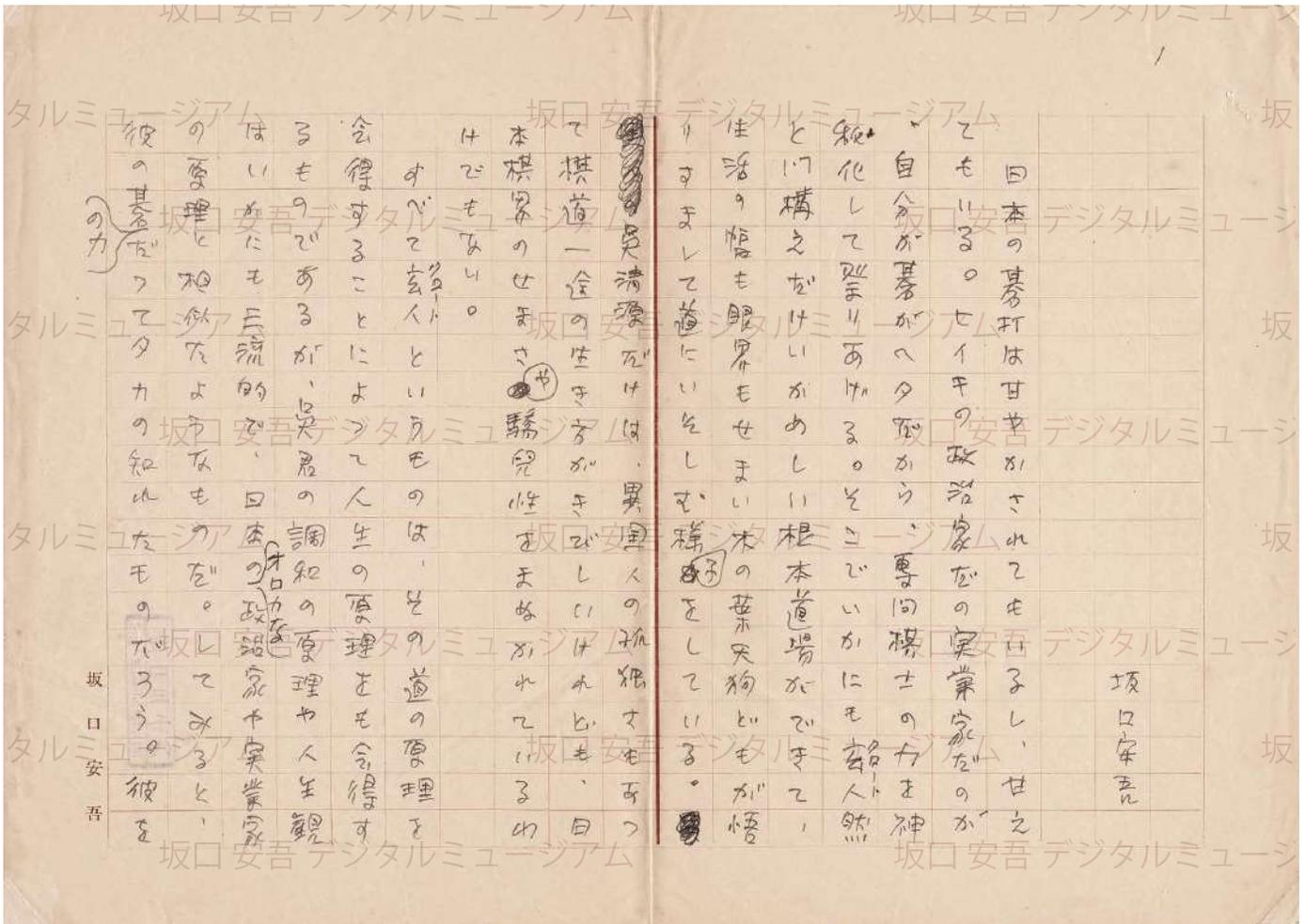


初出誌

坂口安吾 吳清源 『文學界』 第2巻第10号 1948年

新潟市中央図書館 所蔵

「人物素描」欄に、「吳清源」が掲載された。
巻頭グラビアに「文學界」編集部の様子が、土門拳の写真で紹介されている。一枚目の写真では、石川達三が窓ガラスに「文学界」と看板を書き、二枚目には「水曜日の午後」と題して編集同人が集まっている事務室を映し出す。
文によれば、左手受話器を握るのが林房雄、安吾はソロバンをはじいている。頭を抱えるのは、山積する経理に懊悩する船橋聖一、右奥に石川達三、手前井上友一郎。「こんな風に同人 気を合わせて働いたら、面白い雑誌ができるだろう」という希望写真であるという。同人はほかに、亀井勝一郎、丹羽文雄、井伏鱒二、深田久弥が名を連ねている。



〔呉清源について〕 4枚のうち1枚目

未定稿

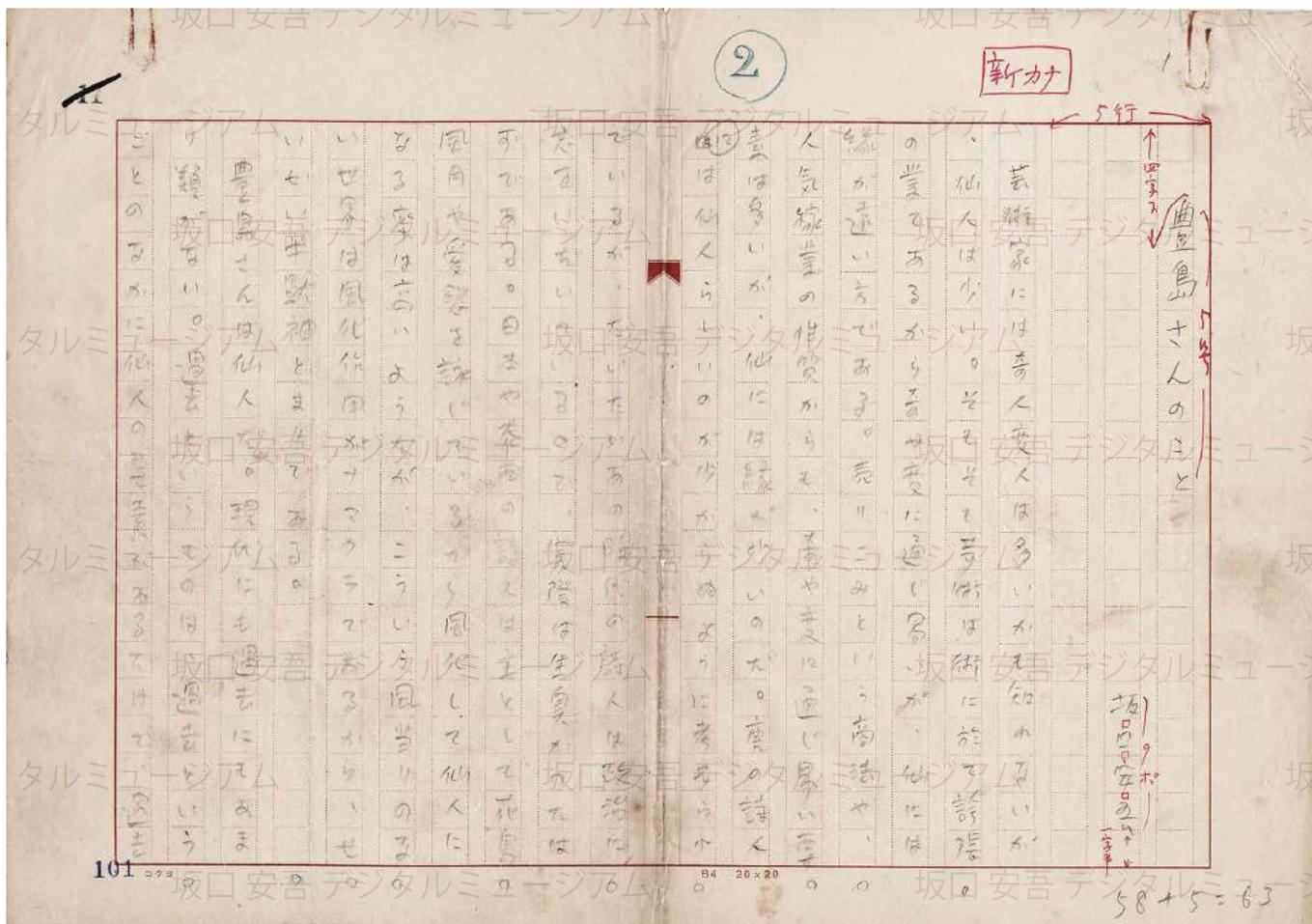
〔呉清源について〕

坂口安吾専用原稿用紙。ペン書き。1951年頃。

〔 〕は、作者がつけたものではなく、内容を記した仮のタイトルの意。同様の内容で、二種類の原稿が残されている。

呉清源という人についてと、碁の対戦について書かれている。1948年に「呉清源」(『文学界』1948年)、「碁にも名人戦をつくれ」(『毎日新聞』1949年)を發表しているが、その原稿ではなく、何の作品についての下書き稿かは不明。

1951年7月4日発行『讀賣新聞』に、加藤信、木村義雄との鼎談「呉・藤沢十番碁を語る」が發表されたが、文中の文言からこの頃かと推測された。



「豊島さんのこと」 5枚のうち1枚目

自筆原稿

坂口安吾 豊島さんのこと

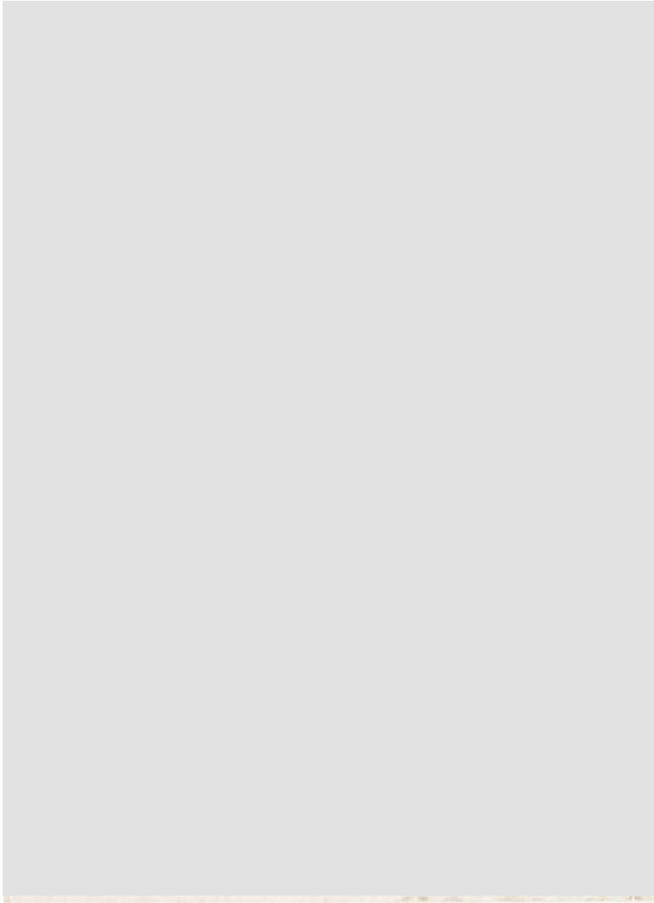
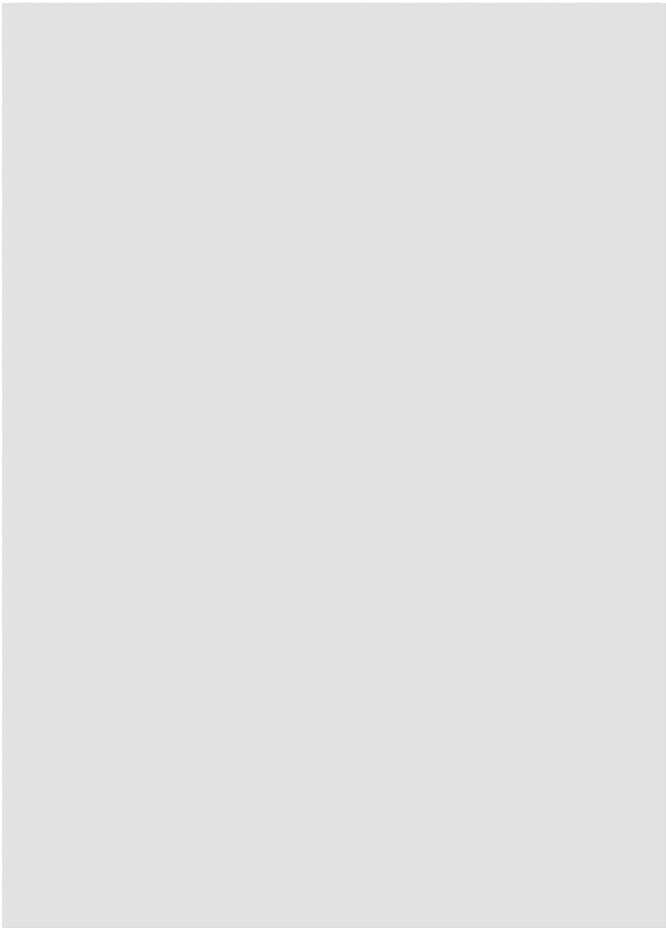
1955年3月刊行『現代日本文学全集』33 豊島与志雄 岸田国土集 の月報27に発表された原稿。

安吾の原稿の末尾に、編集者の字で（昭和三十年一月）（作家）とあるが、月報には（昭和三十年二月）（作家）とある。

豊島与志雄（1890-1955）は、福岡県出身の小説家、仏文学者。

『レ・ミゼラブル』の翻訳は名訳として知られる。児童文学、法政、明治大学の教授も務めた。日本芸術院会員。

太宰治は晩年豊島を敬愛し、太宰が亡くなるまで親交があった。安吾とは碁を通じても交流が深く、この「豊島さんのこと」は、彼の棋風からその人柄を描き出している。安吾最晩年の作品。



尾崎 一雄

坂口安吾についての断片

『坂口安吾選集』第一巻 月報4 1956年

没後すぐに編まれた選集に収められた月報。

安吾も「碁敵かたき」とっていた尾崎一雄が、安吾の棋風について書いている。

「安吾は男らしい男だった」同時に「可なりのはにかみ屋」だったといえる、と書いている。安吾は自分（尾崎）より碁は強かったのに、実際打ってみるとうまくいかない。それは安吾が考えすぎるからで、自分は「(すくなくとも碁に於ては明らかに)鈍感だった」から、安吾に勝てたのだという。

安吾は、そんな飄々と打つ尾崎を「複雑」(文人囲碁会)と評している。

「信長」有難く。

来る二十五日の文壇本因坊戦といふのに出ますか、僕は
出てみるつもりです、さういふ勝負はともかく 久しぶりで
打たうではありませんか

五月二十日

大変面白い随筆を有難く存じました、三月号にぴったり
間に合ひます、^{*}

この頃僕は暮が強くなったが 貴兄は打たぬから弱く
なったでせう、負かしたいが桐生は遠いので残念です、

※随筆：『風報』に掲載された随筆「砂をかむ」のこと

尾崎一雄 安吾宛 1955年2月8日

尾崎一雄 安吾宛 1953年5月20日

尾崎 一雄

1899（明治32）—1964（昭和39）

65歳

三重県に生まれ、神奈川県下曾我に育つ。

志賀直哉に私淑、早稲田大学国文科在学中、同人誌『主潮』に小説「二月の蜂蜜」を発表し、文壇で評価される。大病を患い、その療養生活の中で自然や生き物への観察眼を深めた。心境を綴った私小説の分野で新境地を開き、短編集「暢気眼鏡」で1937年芥川賞受賞。

尾崎が『早稲田文学』編集時の36年の初め、安吾に執筆依頼したことで知り合う。37年砂子屋社主・山崎剛平と早稲田高等学院で同級であったことから、砂子屋の編集に携わる。38年文人囲碁会に山崎と顔を出す。翌年2月、山崎や榊山らの上野砂子屋チームと、野上、安吾ら本郷チームと囲碁対決をして敗れるも、その後安吾とは終生親しくつき合う。

戦後『早稲田文学』の編集に再び加わる。1945年末、安吾と尾崎士郎に誘われて『風報』の創刊に参画。47年9月、途中安吾は企画から離れるが、尾崎士郎・尾崎一雄の共同編集で創刊した。

著作に『虫のいろいろ』1949年、『美しい墓地からの眺め』1948年、『まぼろしの記』1962年、『あの日この日』1975年ほか。

拝啓

御無沙汰してゐますが御健勝のことと存じます。ときどきお訪ねしたいと思ひながら却つてお邪魔になつても、と遠慮してゐます。文人囲碁会へは、平常は碁を打たないのですが、この頃は時々出かけます。乙部吞海さんや村松梢風さんが熱心なので、毎月つゞいてゐる形ですが、川端さんや榊山さん、梅崎氏など、その時によつて顔ぶれが違ひますが、大体十数人は見えてゐるようです。この間の忘年囲碁会では、遊びに来てゐた藤沢九段に四目で打ってもらつて、美事に負けました。流石に専門家は強いものだと思ひました。僕も学生時分からは一、二目は強くなつてゐるつもりでしたが、(碁は打たないので)新聞の碁など見てゐるので、実際に強くなつてゐるようです。(終盤ごろ、細いと思つてゐたのをやはり寄せられて、数へてみると八目違つてゐました。

(以下略)

頼尊 清隆 「花妖」の頃から

頼尊 清隆 安吾宛
1954年1月20日

頼尊 清隆 よりたか・きよたか 1915(大正4) — 1994(平成6) 79歳

大阪生まれ。三高から東京帝国大学ドイツ文学科に進み、同大学院卒業。東京大学囲碁部主将をつとめ、本郷3丁目の碁会所「富岡」の常連で、碁の強さは有名であった。

1938年8月頃、岡田東魚に連れられ「富岡」に来た安吾と知り合う。39年文人囲碁会で、安吾らとともに本郷チームを結成、尾崎一雄ら上野チームと対戦して圧勝した。

1940(昭和15)年、都新聞に入社、文化部に配属。同紙が東京新聞になってからも文壇・文芸を担当。文化部副部長、文芸専門職部長を経て、71(昭和46)年退職。

名物記者で、退職後も、東京新聞編集部文化部に勤め、文壇の生き字引として人生を送った。

著書に、『ある文芸記者の回想』1981年 など。

頼尊 清隆 よりたか・きよたか

「花妖」の頃から

『坂口安吾選集』第四巻 月報3 1956年

頼尊清隆は、東大囲碁部の主将を務めるほどの腕前で、本郷の碁会所「富岡」で安吾と知り合う。

「花妖」は、1947年2/18から『東京新聞』に連載された安吾作品。挿絵を岡本太郎が担当。5/8『東京新聞』文化部の都合で連載が突如中止となる。意欲的な安吾には納得できないものであったが、『東京新聞』の記者であった頼尊が、間にたって苦慮していることを知って、事を荒だてずに済ませたという。

頼尊は、「安吾さんはどちらかということと正当派の面影があり、どこか気の弱いところもある碁」と文中で評している。

教祖の文学 —小林秀雄論—

『新潮』1947年6月

(略)

思ふに小林の文章は心眼を狂はせるに妙を得た文章だ。私は小林と碁を打つたことがあるが、彼は五目置いて（ほんとはもつと置く必要があるのだが、五ツ以上は格好が悪いやと云つて置かないのである）けつして喧嘩といふことをやらぬ。置碁の定石の御手本通りのやりかたで。地どり専門、横槍を通すやうな打方はまつたくやらぬ。こつちの方がムリヤリいぢめに行くのが気の毒なほど公式的そのものの碁を打つ。碁といふものは文章以上に性格をいつはることができないもので、文学の小林は独断先生の如くだけれども、本当は公式的な正当派なんだと私はその時から思つてみた。然し彼の文章の字面からくる迫真力といふものは、やっぱり私の心眼を狂はせる力があつて、（以下略）

棋 風 きふう

対局する人がそれぞれ持っている独特の打ち方や傾向を“棋風”といい、その人の個性が盤上に現れる、といわれる。

坂口安吾も「文人囲碁会」（初出誌未詳）という作品のなかで、対戦した多くの作家の打ち方から、その人の文学の姿を評している。

豊島（豊島与志雄）さんの碁は乱暴だ。腕力派で、凡そ行儀のよくない碁だ。これ又、豊島さんの文学から受ける感じと全く逆だ。

川端康成さんの碁が同じように腕力派で、全くお行儀が悪い。これ又、万人の意外とするところで、碁は性格を現すというが、僕もこれは真理だと思うので、つまり、豊島さんも川端さんも、定石型の紳士ではない腕力型の独断家なのでお二人の文学も実際はそういう風に読むのが本当だと思うのである。

更に万人が意外とするのは小林秀雄で、この独断のかたまりみたいな先生が、実は凡そ定石其のものの素性の正しい碁を打つ。本当は僕に九ツ置く必要があるのだが、五ツ以上置くのは厭だと云って、五ツ置いて、碁のお手本にあるような行儀のいゝ石を打って、キレイに負ける習慣になっている。

要するに小林秀雄も、碁に於て偽ることができない通りに、彼は実は独断家ではないのである。定石型、公理型の性格なので、彼の文学はそういう風に見るのが矢張り正しいと私は思っている。

このあべこべが三木清で、この人の碁は、乱暴そのものゝ組み打ちみたいな喧嘩碁で、凡そアカデミズムと縁がない。

ところで村松梢風、徳川夢声の御両名が、これ又、非常にオトナシイ定石派で、凡そ喧嘩ということをやらぬ。この両名も文章から受ける感じは逆で、大いに喧嘩派のようだけれども、やっぱり碁の性格が正しいので、本当は、定石型とみるのが正しいのだと私は思っている。

喧嘩好きの第一人者は三好達治で、この先生は何でも構わずムリヤリ人の石を殺しにくる。尤も大概自分の方が殺されてしまう結果になるのだが、これ又、詩から受ける感じは逆で、何か詩の正当派のような感じであるが、これも碁の性格が正しいのだと私は思う。

（中略）

僕と好敵手は尾崎一雄で、これは奇妙、ある時は処女の如く、あるときは脱兎の如く、時に雲助の如く喧嘩腰になるかと思うと、時に居候の如くにハニカむ。この男の碁の性格は一番複雑だ。これ又大いにその文章を裏切っているがやっぱり碁の性格が正しいのだと私は思っている。（以下略）

本因坊

織田信長、豊臣秀吉、徳川家康に仕えた日海を開祖とする家系で、囲碁四家元（安井家、井上家、林家、本因坊家）のひとつで、筆頭格の家柄。明治以降も受け継がれるが、1938（昭和13）年第21世秀哉（しゅうさい）が引退した際、その名跡を日本棋院に譲渡し、実力制に移行することとなった。

「本因坊」の名は、棋界随一の実力者が名のるべき、という世襲本因坊秀哉名人の思いから、選手権制の本因坊戦が行われるようになる。

将棋が1935年より名人戦を開始したのに対し、囲碁は1939年準備が整い、当時の高段者が参加して、本因坊戦が行われた。4度のトーナメント戦で、上位2人の決戦によって決まった。

本命といわれた呉清源は、4度のトーナメント戦の内、2回優勝したが、規定によるポイント不足で涙をのむ。1位の関山利一と2位の加藤信の間で6番勝負が行われて、3勝3敗。1941年、規定により予選1位の関山が初代実力本因坊となった。

第1期から5期までは2年で1期の開催、6期より1年1期となる。当初は、東京日日新聞及び大阪毎日新聞主催、のちに二社が合併して毎日新聞主催となった。

安吾が観戦した、呉清源と十番碁をおこなった本因坊は、第3期本因坊戦を征した岩本薫。本因坊戦の第2局が広島郊外で行われて、原子爆弾の被害に遭ったという。1946年7月高野山の決戦で岩本が新本因坊となった。岩本は第4期も、木谷きたに實の挑戦を退け、防衛を果たした。

実力者を選ぶ選手権である棋戦が、本因坊戦以降次々と開催されるようになった。

1953年最高位戦（朝日新聞社主催）、1956年まで呉清源十番碁を開催していた讀賣新聞社が、57年実力名人を決めるという日本最強決定戦を開催。のち61年名人戦（旧名人戦）（讀賣新聞社主催）となる。現行の名人戦は、76年より朝日新聞社主催で開催されている。

また、53年王座戦、62年十段戦、75年天元戦、76年棋聖戦、碁聖戦がはじまった。

囲碁は各新聞社等主催で、現在7大タイトル戦が行われている。

川端康成

呉清源棋談・名人

1954（昭和 29）年文藝春秋新社



「坂口安吾様」と、見返しに著者署名がある。

「呉清源棋談」は、川端が一日 3、4 時間、三日間という十分な時間をかけて呉清源に取材し、碁歴、碁に対する考え方などを明らかにしようとしたもの。当時（1953 年）呉清源は 39 歳。箱根仙石原に住んでいた。

「碁は調和の姿だと私は考えます」

「調和を破った方が、石を取られ、地を失い、碁に負ける」

碁の才能とは、「記憶力や推理力を総合したもの」「推理が一番大事」

「記憶は推理の力になる」

などと、呉清源の碁に対する考えを、印象深い言葉として引き出している。川端の取材力と、その文章に惹きこまれる。

§ 1953 年 8/19～12/7 讀賣新聞夕刊に 41 回に渡って不定期掲載された。

「名人」は、世襲制最後の本因坊秀哉（64 歳）が木谷七段（29 歳）と対戦した、引退碁の観戦記を書いた川端が、その観戦記に基づいて小説に仕立てた異作。

対戦は、1938 年 6 月 20 日、持ち時間は異例の 40 時間、本因坊の病気もあり、20 回の打ち掛け（勝負を中断すること。最後の一手は「封じ手」、再開することを「打ち継ぎ」）を挟んで、12 月 4 日木谷の 5 目勝ちだった。名人は、実力戦の結果を見ることなく、1940 年 1 月 18 日熱海の旅館で死去した。

著者あとがきによれば、「対局の棋士の風貌、表情、動作、言葉は勿論、対局の時間、天候、部屋の模様や床の生花に至るまで、丹念にノオトして、観戦記にも使ひ、この作品でさらに書き加へた部分もある。」「棋士の心理はすべて私の推量である」とし、「小説であっても、私の精励な凝り性の一面が、観戦記にもこの『名人』にも出てゐる。そうあり得たのは観戦記当時の碁好きのせみばかりでなく、名人にたいする私の敬尊のおかげである」と記している。

§ 観戦記は、東京日日新聞・大阪毎日新聞に 1938～39 年に渡って 64 回連載。長期戦だったため、対戦中に発表するという異例の形をとった。

呉 清源 ご・せいげん

1914年 中国・福建省出身 本名：呉泉 清源は号
1928（昭和3）年 来日 瀬越憲作名誉九段に入門
1936（昭和11）年 帰化し、呉泉（くれ・いずみ）を名乗るが、日本の敗戦とともに中国籍・呉清源にもどす。1979年再び日本国籍にする。

1942（昭和17）年 8段、 1950（昭和25）年 9段推挙。
1958（昭和33）年 第一期日本最強戦に優勝し、橋本宇太郎より名人に押すことが提案されたが、実現せず。
一時、日本棋院を離れて、讀賣新聞囑託となる。
のちに復帰し、日本棋院名誉客員棋士

従来の記憶による上達法から、思考による上達法へ碁を進化させた。
数々の十番碁を勝ち抜き、日本囲碁界の第一人者として君臨した。
「新布石」以外にも数々の新手法をうみだし、十番碁における圧倒的な成績から「昭和の棋聖」と称された。
抜群の戦績と華やかな芸風で、常に棋界一の実力者として遇せられた。

安吾は呉清源の強さを、「彼の勝負にこもる非人間性と、非人情の執念に、日本の鬼どもがみんな自滅してしまうのである」と分析している。（「呉清源」1948年）

戦後タイトル戦が中心となるが、1961（昭和36）年交通事故に遭い、その後遺症でトップに立つことができなくなり、そのため称号はない。
1981（昭和58）年 古稀を機に引退
2005（平成17）年 日本棋院より囲碁殿堂にノミネートされるが、「まだ修行の身」を理由に辞退。翌年も同様。
2014（平成26）年 老衰のため死去。100歳

門下に、林 海峰、芮 迺偉（ぜい・だいい）。

木谷實（きたに・みのる）とともに、「新布石」の創始者として知られる。
新布石：木谷の中央を重視する法と、呉の速度を重視する法を合わせた斬新なスタイル。木谷、呉の活躍でブームを巻き起こした。

座談会

呉・藤澤十番碁を語る

讀賣新聞 1951(昭和26)年7月7日掲載

加藤信(囲碁8段)、坂口安吾、木村義雄(将棋名人)3人が、呉清源と藤澤朋斎(ほうさい 1919-92)の2回目の十番碁が開催され、その模様を3人が語り合ったもの。

呉と藤澤はこの翌年3回目の十番碁を戦い、結果、初回は藤澤が、あと2回はいずれも呉が制している(3回:6局まで呉5-1で打ち切り)。この時期呉は十番碁の高段者に圧勝して九段に推挙(1950年)され、藤澤は大手合で九段に昇格(1951年)していた九段同士の対局として注目を集め、加藤氏の弁によれば二人の棋風は、「呉さんは天才型」「藤澤君の方は押しの強い碁」だという。

十何年前のことだが本因坊秀哉しゅうさい名人と呉清源（当時五段ぐらいだったと思う）が争碁を打ったころは碁の人気は頂点だった。当時の将棋は、木村と金子が争っていたが、人気はなかった。近ごろの将棋名人戦のすごい人気に比べて碁の方は忘れ去られた淋しさである。

将棋の人気はいうまでもなく実力第一人者を争う名人戦の人気である。昨日の名人もひとたび棋力衰えるや平八段となり時にBC級へ落ちることもなきにしもあらずである。実力だけで争う勝負というものは残酷きわまるものである。その激しさ、必死の力闘が人気を生むのである。

碁の本因坊戦ときてはたかが一家名をつぐだけのことにはすぎない。今日の新時代では法律的にすら家名が失われているのに本因坊という一家名を争うことがすでにコッケイであり、事実においてその試合内容も棋院大手合を第一義に、ただ二義的な花相撲的な空虚な景気をおおっているにすぎない。生死を賭した力闘は見られないのである。

碁も名人戦をやらねばならぬ。実力第一人者を争うギリギリの勝負でなければ決して天下の人気をわかつことはできない。伝えきくところによれば目下の棋士の力では名人戦を争うと結局名人位が呉八段に行く、つまり中国へ持って行かれてしまう、それを怖れているのだという巷説であるが、そんなバカな話はない。

今日の日本に於てはチェスに於て、またあらゆる外国種のスポーツに於て、各々日本の選手たちは世界の選手権をめざして精進しているのである。碁の選手権が中国へ持って行かれるそのことだけでも、すでに碁の世界化、世界的進出を意味する慶賀すべきことではないか。誰が日本の国技ときめたわけでもないのに小さなカラにとじこもって日本人だけで一家ダンラン、あげくは一家名の争いという花相撲でお茶をにごして世間に通用させようという。ダメですよ、世間が通用させてくれません。

実質がなければ人気はでない。大衆は正直なものだ。プロ野球に人気が出てたのも実力が向上し、監督がブン殴り合ったりするほど試合というものに精魂をこめ選手権を目指して必死の力闘をするからである。名人位がどこの国へ持って行かれようと真に実力がある者が名人になるのは当然で文句のあるべき筋はなく、かくの如きに真の実力を争うことによって大衆はその力闘にカッサイを惜しまないものである。

呉清源を加えて名人位を争うのでなければ碁は世間の片隅の幫間ほうかんの存在として危く寄生するようなカタワな存在となるだけのことであろう。

展示室平面図

明治29年新潟商家明細

略歴

用語解説

棋風

展示解説

関連年譜 二段位認定書 座談会 読売新聞

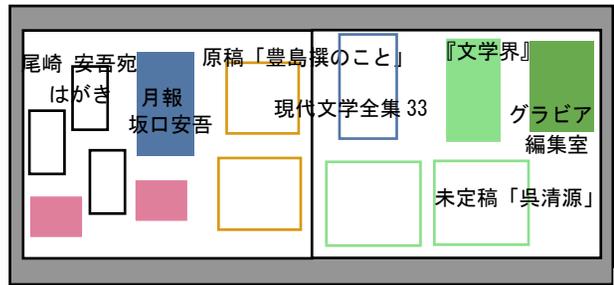
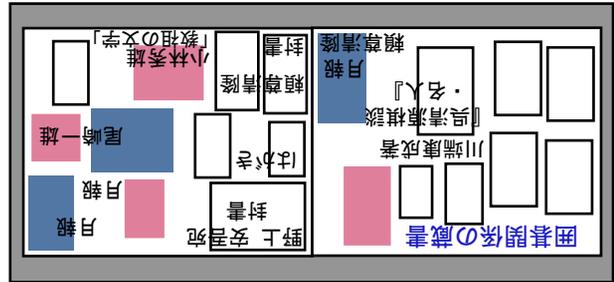
本因坊

追悼囲碁会

三段位追贈

吳清源 死亡記事

「碁にも
名人戦をつくれ」



安吾と囲碁

2023. 9月2日〔土〕—12月17日〔日〕

文人囲碁会

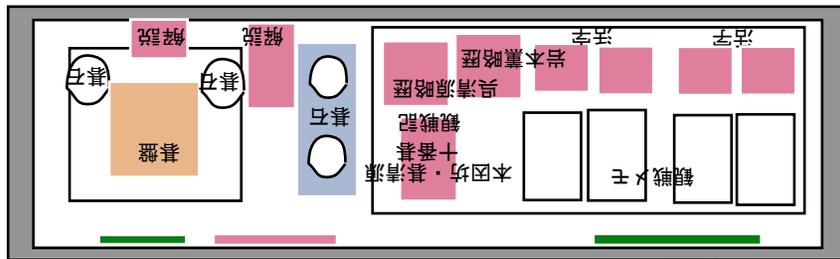
観戦記 読売新聞

「安吾新日本風土記」
宮崎の巻

もみじ旅館の書簡

坂口安吾年譜

写真パネル
資料パネル
解説



棋譜 吳清源 VS 安吾

本因坊・吳清源
十番碁

展示室





参考文献

1. 囲碁関係の作品

- ・ 囲碁修行 全集 2 1938 (昭和 13) 6/21 ~ 23 『都新聞』 文芸欄
- ・ 市井閑談 (三) 碁会所 全集 3 1939 (昭和 14) 年 5/6 ~ 8 『都新聞』 文芸欄
- ・ 負け碁の算術 全集 1 5 1940 (昭和 15) 年 『囲碁クラブ』 第 16 巻第 11 号 「秋の随筆」 欄
- ・ 教祖の文学 全集 5 1947 (昭和 22) 『新潮』 第 44 巻第 6 号
- ・ 文人囲碁会 全集 6 未詳 (『教祖の文学』 収録)
- ・ 本因坊呉清源十番碁観戦記 全集 6 1948 (昭和 23) 年 7/8、9 『讀賣新聞』
- ・ 本因坊呉清源十番碁観戦メモ 全集 1 6 1948 (昭和 23) 年 7/7、8
- ・ 呉清源 全集 7 1948 (昭和 23) 『文学界』 第 2 巻第 10 号
- ・ 私の碁 全集 7 1948 (昭和 23) 『囲碁春秋』 第 2 巻第 12 号
- ・ 碁にも名人戦をつくれ 全集 7 1949 年 5/29 『毎日新聞』 評論欄
- ・ 明日は天気になれ 全集 1 3 1953 (昭和 28) 年 1/2 ~ 4/13 『西日本新聞』 夕刊 連載エッセイ
珍試合の巻、碁会所開店、文士の碁将棋
- ・ 新日本風土記 第 1 回高千穂の冬雨降り 全集 1 5 1955 (昭和 30) 年 『中央公論』 第 70 年第 2 号
- ・ 豊島さんのこと 全集 1 5 1955 (昭和 30) 年
『現代日本文学全集』 33 「豊島与志雄 岸田国土」 月報 27
- ・ 未定稿 [呉清源について] 全集 1 5 1951 (昭和 26) 年頃
- ・ 座談会「囲碁・人生・神様」 呉清源、川端康成、豊島与志雄、火野葦平、坂口安吾 全集 1 7
1949 (昭和 24) 年 『文藝春秋』 第 27 巻第 7 号
- ・ 鼎談「呉・藤沢十番碁を語る」 加藤信、木村義雄、坂口安吾 全集 1 7
1951 (昭和 26) 年 7/4 『讀賣新聞』

2. その他関連作品

- ・ 勝負師 全集 8 1949 (昭和 24) 年 『別冊文藝春秋』 第 12 号
- ・ 明治開化安吾捕物 その 7 石の下 全集 1 0 1951 (昭和 26) 年 『小説新潮』 第 5 巻第 5 号
- ・ 名人戦を観て 別巻 1947 (昭和 22) 年 『将棋世界』 第 11 巻第 7 号

3. 安吾以外の作品、資料

- ・ 尾崎一雄 「坂口安吾についての断片」
『坂口安吾選集』 第 1 巻 月報 4 1956 (昭和 31) 年
- ・ 頼尊清隆 「『花妖』の頃から」
『坂口安吾選集』 第 4 巻 月報 3 1956 (昭和 31) 年
- ・ 川端康成 「呉清源棋談・名人」 1954 (昭和 29) 年 文藝春秋新社
- ・ 呉清源 「碁清談」 『随筆』 1942 年 砂子屋書房
- ・ 尾崎一雄 「ボヤキの大岡」 『尾崎一雄全集』 第六巻 1982 (昭和 57) 年 筑摩書房
- ・ 梅崎春生 「烏鷺近況」 『梅崎春生全集』 第七巻 1985 (昭和 60) 年 沖積舎
- ・ 中野孝次編 『日本の名随筆』 別巻 1 囲碁 2000 (平成 12) 年 作品社
- ・ 日本囲碁連盟 「囲碁用語」 ほか
- ・ 野上彰詩碑 (徳島市新町橋 1 丁目 昭和 46 年 7 月 野上彰詩碑建立期成会)